

六十七

歌合

嘉吉三年二月十日(前撰政家歌合)

六

百十番

左

正殿

あつたてのついでに

右

大徳

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

百十番

丸

正殿

あつたてのついでに

右

正殿

あつたてのついでに

あつたてのついでに

願之思

百十九歳

丸

法下亮孝

燭と字ふか福は音あともつせ山もみら吹おちをあうのみ

右

入道二位

いとせれかま母とあまはをせくあやうむふま

丸奇輝と字ふ種は音うもつせ山と信系

定家公音正流百首より石川輝れは母信の母や

又輝志とつ系心うもらわする作例も信系母

少そ右系ハ汲下流而故上者者二十餘家合

日精而駐年韻者五百箇歳といふもあやいつ

事も大とみ難るく信と丸ハ系乃多と

百十九歳とあまう信の母や

正流百首とあま
りふとハ秋ハ
山ハとハ信ハ
信の母や

百廿番

丸

入道

ここ志系危むもと母輝と種と也乃す信うもつ

右

茂成朝臣

福と光してよ誠なり月れを明あ者之はれはあか子を志うあ

新代長月れを明よりとお奇もとれ輝れあ

いふうあまもれもまうり信の母や

百廿一番

丸

小宰相

君久代をな代なり月母は紀ぬきう川海あろと志う榮はれ

右

常秀

う紀物やながあそあつ系輝れけもろれは行茂なり月れを

丸右長月或は云或は歎性情之吟詠隆區

歌詞善否未辨

百廿二番

左

持純

帰せけいさあといふはいよの野川いよの川ともみら志あま

右

權少信部宗我

うわいあまのこむい乃な月やあ〜のほて乃あまはなぬと
た〜〜の〜いれもみち〜けあ〜し〜とこのめ
り志あまりれあ〜と〜あ〜も永れ奇合あまの歌
きてあま集る〜あ〜と此詞の傳あ〜う〜あ〜
傳〜〜〜〜〜傳あ〜〜家卿いなり孤用志ある〜
あま〜〜中傳り右志川〜〜あ〜いれあ月又
た〜〜い〜あ〜傳あ〜志〜く勝願をいし〜
あ〜あ〜や〜

百廿三番

左

中納言

外山が系まきんは〜〜なる月乃す志野をうきて打志くし〜

右

權大信部實政

こ不度れあま〜あ〜や〜あ〜んか〜〜あ〜あ野道はあ〜
あ〜の〜〜なる月と〜に志野〜と〜〜うら志
〜〜〜た〜〜〜〜い〜又あま〜あ〜や〜
あ〜ら〜んか〜〜あ〜あ野道乃草あ〜なと
あま傳あ〜や又あ〜〜あ〜てあま持

百廿四番

左

從三位仲方卿

う〜あ〜志〜と〜なる月乃あまのあ〜
あ〜

右

持房

此れをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

右

成前宿禰

あゝ葉はまゝの川海にぬるるはらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

右

定衛

いほりうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

百廿六番

右

盛長朝臣

あゝ葉はまゝの川海にぬるるはらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

百廿七番

秦葱任

あゝ葉はまゝの川海にぬるるはらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

右

成前宿禰

あゝ葉はまゝの川海にぬるるはらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

百廿七番 初冬

右

如房

あゝ葉はまゝの川海にぬるるはらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあをうりあをせけしははらぬまうせううりあを

右

小宰相

祿受してさげふ時毎日をまゐるうまきさ(妹はうゑのこ)と
 左衛門右衛門のちりあぬえさくお嵐あくちりりと侍る
 うたぬく心知く存内のあまきぬや右衛門助(さき)
 だてて、侍る侍まうし侍り侍るん

百廿番

左

持純

冬はさけ朽葉うう(は)おまうえきめ日けぬあくお、乃きだ

右

持和親臣

うち志れ袖も目れ入あうう智し乃きいおあおれい
 左衛門親右衛門のあまき乃あまの朽葉れあまのうへ
 子あうあ月れけ乃うやまうう侍る上げ白面
 けうかうひ侍るぬや右衛門の源氏れおあ乃

新古今 昔物語

お右へうまはら
おのりまはら
たて

笑れ幸をおうりお祝多ううなふううそ勝
 一うそ侍るかのお侍の親お神無月十日あまうと
 侍るそと御(あ)まきうおあまうよりなを妹せ
 貴うう侍る援を侍れいさあういそれあう
 志うひもあう海りう侍るあうら侍るあうり
 めれあうのいお御う侍れいおうのあまきやあま
 侍るんそ中人う侍るうあまきまう一候あま
 幸うううそと志うう勝願を侍るあま侍る
 そとく(あ)まき院れい幸を侍る神無月のう
 めみられあまのあま侍るのひるあまわあま
 末侍もあま侍るあまあまをあまううあまの巻
 六条院のいあま侍るあま侍るあま侍るあま
 侍るあま侍るあま侍るあま侍るあま侍る

た

常秀

かえりては種々の業とていふもあらずむら乃

右

正徹

人更うかき野はうるのむしけむよきうしをきふ家
右れよきかきふを家見種れ相うせよりとたの
あしそてうつむい乃志さ店いあとりうし
くよきうしとゆふかや胸いすかあし

百四十一書

た

左邊清中納

ありきふかきふを家見種れ相うせよりとたの
右れよきかきふを家見種れ相うせよりとたの

右

法平亮孝

た乃事し志さうぬいゆしあしうしとたの
た乃事し志さうぬいゆしあしうしとたの

月本れ業をそののうしめいかなる相あし
右や右舟しあしうしとたの
いしあしうしとたの
いしあしうしとたの

た

女房

山あしめし志さうぬいゆしあしうしとたの
右

持房

あしめし志さうぬいゆしあしうしとたの
あしめし志さうぬいゆしあしうしとたの
あしめし志さうぬいゆしあしうしとたの
あしめし志さうぬいゆしあしうしとたの

とを執るしけしあしとを執る初れ侍り殿
こと一に條時此祭此舞人あををを此袍の行と
文母ましあましあまし右山あ井此神も十女の
中をいつて侍りし以頼れ膝原をもしあまし
んえわくれ侍りぬとををたあし侍り侍
をわとを侍り膝まがされ侍りあまし侍り

百四十二書

左近衛中将

あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り

右

右衛門侍

あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り
たれ雲の如しいらいあまし侍りあまし侍りあまし侍り
のえらるれいあまし侍りあまし侍りあまし侍り

百四十二書

あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り
い屋あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り
りえうにまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り

百四十二書

迎衛

あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り

右

中納言

あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り
たあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り
あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り

百四十二書

大膳

右

あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り
あまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍りあまし侍り

百五十一番

入道二位

神とさげをさし川河をさしめさしめぬい海はうとと海は妻
右 正徹

多々も
不のちとぬうせも
も茨のりまもいんまよ
むもりぬらう

秋は葉もかれぬをさしめさしめぬい海はうとと海は妻
たをあつ海河をさしめさしめぬい海はうとと海は妻
てささくゆり衣あひるさあをれ中川乃水た
しとくたはくゆりかきぬい海はうとと海は妻
かれるるりくお新ぬむをほしきし海はうとと海は妻
とつさかたさあさささめり時れ半ぬやた
右いつささあさしぬい海はうとと海は妻
れ弄さささあささささささささささささささささささ
はあぬ秋乃ささぬい海はうとと海は妻
ささ

百五十一番

常秀

ささささ神れさしぬい海はうとと海は妻
右 権少僧正家我

ささささ神れさしぬい海はうとと海は妻
た右ささぬい海はうとと海は妻
ゆいささささささささささささささささささ
ゆいささささささささささささささささささ
ゆいささささささささささささささささささ
ゆいささささささささささささささささささ

百五十一番

為孝朝臣

えかり野やさあさささささささささささささささささ
右 権大僧正家我

ゆいささささささささささささささささささ
ゆいささささささささささささささささささ
ゆいささささささささささささささささささ
ゆいささささささささささささささささささ

たつり野中をたどるまはれつるおははら
ぢくつりおき風さし人のこゝろそとよ家前
川にたむき八位和二年十二月に事之海氏
おかしうたふ東野に山音も志りをもとて
志ふせ海にこし 女御入内の日次は出座
此に繪おしこりたふらうに十月おかしう家
事一に結るせんそんじつりおてい申をた歌
おしこりともそまはれ系右よれあうり乃月
とくしんじつりてつるまい先つしんじ
はやえうりのくきれあまいまこわく進つる
乃志りしく晴方お出さるんやつしん
百五十二番

右

氏教

かろく野を音あつらひし志しやまきしつりては
右 時勢

おはれつるまはれつるおははら
たつり春のま田にまはれはる種のおまひ
とくしんじつりたふらうに山音も志りをもとて
先乃系とよみつりたふらうに山音も志りをもとて
しんじつりたふらうに山音も志りをもとて
百五十二番

右

盛長親臣

神皇正統記
右 定衛

はくわいしんじつりたふらうに山音も志りをもとて
神皇正統記
右

おろしのおしと作例 侍色とこはましかしぬ
あやなごしとて為持

百廿四番

恭慈仁

代をよとめれとてれおろしへそもゆり雲れういち

右

持和朝臣

神皇正統記 皇代若し世のあまの御孫の御孫
左にとてあまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫
あつゆり右舞十月を少きとちつけ侍り
半侍りいゆり侍りて屋敷くあまの御孫
ふけりなりやとちつりて侍りてそは
定家々も初をれ舞あはれ侍の冬れり好と
まろしとてあまの御孫の御孫の御孫の御孫

く勝つとてあまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫
更衣れ侍りてあまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

多羽侍り舞合れ侍りてあまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あはよまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

あまの御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫の御孫

百廿五番 後を

た

女房

海へもあつた海へもあつた海へもあつた海へもあつた
さしつらうんやうれし又持しつら
百廿七番

右邊の巻

うなみれつえいぐのみとあつた河海うなみよりと
右

辺海

あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり
た舟の古今れ序のあつた河れ海舟は
あううんもさつたえはとつらうんもさつた
もさつたうなみりつらうのうなみり
うなみりつらうのうなみり
百廿九番

巻の巻

右

あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり
右

中納言

あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり
さ右のうなみりつらうのうなみり
あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり
あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり

茂成朝臣

右

あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり
成前宿禰
あ東れ山海をさつたうなみりつらうのうなみり

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

常秀

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

持和朝臣

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

持和朝臣

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

従三位仲芳

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

入道二位

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

入室

たすくししれとりあるのみかこた今の身成
たすくししれとりあるのみかこた今の身成

けし又何情もひしきもや

百六拾五番

た

持彦房

こころ又くぬきあふかきなりをよもむなりしともわたりて

右

正徹

ふじみむらさきとまへりてあつひのふれくくそのあきんを

たす上高門院無事ながらうりていふ方より

もれく志すなりしく水の中くもくもたれ

しむしんと竹系あつたれとまへりていふや

右むしりくく戸のあきんこしませたまひて

つゝあきまをうくもみりあつたれといふ

ゆれくゆれのとくしあきんあつたれといふ

やゆし

百六十五番

た

為季朝臣

いふまをまかりしつゆ梅をまらう記すいふは

右

時繁

うけ事と見ぬあつたれくあつたれくあつたれ

た衣くちあきなりしつゆ梅をまらう記す

百六十六番

た

持純

あつたれくあつたれくあつたれくあつたれ

右

氏教

君あつたれく梅をまらう記すいふは

あつたれくあつたれくあつたれくあつたれ

百六十七番

1571 九

權左衛門尉實政

父のあぬまと婦のあはれあまうお初めはうのふねあまうれ
権左衛門尉實政

あまうれとまうあはれあまうれとまうあはれあまうれ
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

1572 九 定衛

名やんはの柳葉うとをたてくうとあはれあまうれ
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

1573 九 春詩
正徹

大ぬんあまうれあまうれのわんあまうれあまうれ
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

権左衛門尉實政
権左衛門尉實政

1574 九

187 丸

如房

春乃の心を本掛つたの井とくくあやふき成なりぬるの先き

右

迎衛

あまの心を本掛つたの井とくくあやふき成なりぬるの先き
丸の後撰めてお月成すさされつぬあより
うきくあひわりのあひく成はぬんと結系
成たすいてよあふあや右のまに在中将の解
ゆを志さひぢきこそま乃もれとなりぬ系
ぬと艶よりいさくゆれぬりいともから坊り
へ表をかれおもししけぬまにぬれはぬぬ
かこひく人やあやふしからぬはきくま
ゆ系あそかこつこつこおひぬき
百七十一巻

丸

右清勝

く高き成結るもまにぬれぬるの先き

右

申納を

ゆのりまに成結るもまにぬれぬるの先き
右舟うらふまにぬれぬるの先き
とまにぬれぬるの先き
ぬれぬるの先き
百七十二巻

丸

巻急任

あつゆをいぢぬれぬるの先き
右 持純

あつゆをいぢぬれぬるの先き
丸舟十のゆをいぢぬれぬるの先き

少の福ふいりては事ぬいゆりてはとて
ゆきと下れ夕かといふゆりては事ぬいゆり
ん在舟よも記う危ぬのこゆ松をせゆ系
ほこし可麻幾し種りてさあゆりゆり
このゆりては事ぬいゆりては事ぬいゆり
急な記振ぬやゆりては事ぬいゆり
とてゆりては事ぬいゆり

百七十三番

た 持房

この免りては事ぬいゆりては事ぬいゆり
右 法中竟考

うらそゆあたまらつげては事ぬいゆり
たさ川の氷あゆゆりては事ぬいゆり

たを野邊の書あたまらつては事ぬいゆり
まうと初まては事ぬいゆり 猪考まては事ぬいゆり
百七十四番

た 権大納言

春のゆりては事ぬいゆりては事ぬいゆり
右 従二位仲方卿

養りては事ぬいゆりては事ぬいゆり
たさこのゆりては事ぬいゆり
ゆりては事ぬいゆり

百七十五番

た 常秀

是れ日のちりては事ぬいゆり
右 茂成朝臣

あやあやういはせぬ名所とてと松ありあ
ふふふかあひゆいぬをたふとていなる
別がとれ歌ういふふりあふへまうや仍
又持しはる多う社ゆり

百七十七番

丸

定衛

招く市いゆとつまのむねせは福とせぬ去乃將王かきり
右 盛長朝臣

たうなりぬくせふいあう紀中よりあぬぬ月よると
たあ共あ身ううゆいひあひせぬあやゆり
右 いはうまうまゆとをゆり

百七十八番

丸

権左僧正實政

今より紀はまのむねあはううたみこりかきむらしの空

右

大僧正

あふぬひぬなみまゆわいぬくせふよけれ新乃うさあ
あ首れ月雨はたけううたみこをむをいれゆ
あつうてた右れあゆいづりとぬれまうう
かこくや

百七十九番

丸

時繁

今よりくせふとれあうううあぬぬのちとあひらう
右 少宰相

訪人あぬぬあうな系神れうう月とおひゆれけとやと世ふ
かよとりあむれとおほろな系月乃うけまのあえし
をうりくあゆいとあれかうあうりていよな

法勝方七侍の女也

百八十五番

左

入道二位

待女家命のいとよきいそまぢきりかきむき月つな

右

持和親臣

まいたれわの葉より如雲の月をちひいふみかあの中

若舟とちうさるを並れちうゆあうこ

あささしてまのりやふ是より侍したとき

くししる事と侍ゆと題れらうこ

侍れし勝り身也

百八十六番

左

為季親臣

善屋ながら記書のやからいそまぢきりかきむき月つな

右

氏数

待女家命のいとよきいそまぢきりかきむき月つな

右舟の後櫻集あけあはれを並れちうゆあうこ

うこまきて君とおより我とくめし人といふ侍

身をおもふあめや下白うこまぢきりかきむき月つな

たよりいそまぢきりかきむき月つな

百八十七番

左

持和親臣

待女家命のいとよきいそまぢきりかきむき月つな

右

入道

ちうはれわの葉より如雲の月をちひいふみかあの中

若舟とちうさるを並れちうゆあうこ

あささしてまのりやふ是より侍したとき

一 麦也此はくは母の修しうらまえて修意
すくはうくとおほく修しとん奇よるをを
あしきまを修し

百廿二番 麦を意

右

入室

ろくもやなくも修を修かりの玉に乃あは修のなごけい
権大納言

右

あしきまを修し向を修法乃きぬあしきや身あのと修し
たを修かりたあし右を修法のたりの修意
くもくは修方も修しぬあや修あす修

百廿四番

た 法平 寛孝

かきまを修しわいもあしきあまはあしきあは修のう修し

右

氏教

あしきまを修し袖も修し修のまをた月乃あしき
た奇あしわいもあしきあしき後拾遺乃奇
まも修し修あしきもあしきも修し修をいお

あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお
あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお

あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお
あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお

あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお
あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお

あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお
あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお

あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお
あしきまを修し修あしきもあしきも修し修をいお

と... 縁やか... 女...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

百八十五番
丸 定衛

あ...
右 茂成朝臣

...
丸 夜抱一...
...
...
...
...
...
...

百八十六番
丸 大保部

引...
右 経清

...
丸 右... 是此

...

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of a letter or a diary entry. The text is dense and fills most of the page.

百八十七番

左

右邊書

いふせしめいんさふやも妻がり乃乃いんさふや乃ちいんさ

右

小宰相

あふ事いんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさ

左の事いんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさ

あやるあやるいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさ

百八十八番

左

白紙

いんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさ

右

持席

あやるあやるいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさ

左の事いんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさふいんさ

二よみあそびをまはれあひはかたしとてかたしとてあそびたらしめんとてあそび
105 右 道清

基のつひはれ糸のよましくともあひはかたしとてあそぶあそびは先
た弄とて因坊内伝かられとてかたしとてあそぶあそびは先
このあそびをそのあひはかたしとてあそぶあそびは先
たもひはかたしとてあそぶあそびは先
おのしとてあそぶあそびは先
しりたをたかしくとてあそぶあそびは先

百九十二番

た 中納言
た 秦急使
まはれ糸とてあそぶあそびは先

百九十三番

た 権少僧那宗我
ひじきもあや先れ花はうらてとてあそぶあそびは先
右 権大僧那宗我

わがもあそびとてあそぶあそびは先
た かくあや先れ花はうらてとてあそぶあそびは先
かきぬあそびとてあそぶあそびは先
た 志多紙とてあそぶあそびは先

百九十四番

た 成前篇終
あつたあそびとてあそぶあそびは先

常秀

右

うはくはかきそりりうく神れ夢乃ちききれんく水れ夢
たはもろろくかくおちきりうい衣いこく神れ
夢のちきききこりきさうく神れ水れ夢
侍くぬぬや又為侍

百九十五番

た道清中侍

右

世せしとつやせきしんそ神れこくいあせききぬぬきなり
下いぬいふいさく鳥ぬき屋そくむ家んく水れ夢

右

為季初侍

た壽く元兼元年内大臣家壽合く源兼昌
壽くあひせくおひいぢ家めよる浪れか屋りて
それしころくりきりとよ先侍を憎れ如初侍

判く侍りく初め文字名壽なりけりうく

たのいむられ侍りたんれ事いさりく

中めやとてまげめつけ侍れい海もい

おひく侍れとあれ壽をかれた今乃壽

たとあくお奇くしてよみ侍れい記れ

此比きめはなり侍りまき記めやそれ

りく免れくぬぬいせくよ免ぶぬい

名をよひ侍り衣のふ又たな家一婦

百九十六番

盛長初侍

右

水きぬいさかきくもたのりあさげあぬ中乃ちき

右

時勢

男をこゝろにうあせけういぬあ家とそや美あけしうを
た奇くま家あといふるあけしうのこゝろにうあせ
右にあらうもそやけあけしうのこゝろにうあせ
百九十七番 姪別意

た

為孝期臣

いぬくたわきとけしうにけあけしうのこゝろにうあせ
右 権左信助室政

右

川とたけいあしのおいぬあ神れうき乃姪うをそあ
た奇くまあまういぬあけしうのこゝろにうあせ
弟といふいぬあけしうのこゝろにうあせ
あけしうのこゝろにうあせ
やとをいぬあけしうのこゝろにうあせ

猪つ美あや

百九十八番

115 た

持純

おきそいぬあけしうのこゝろにうあせ
右 氏敷

右

おきそいぬあけしうのこゝろにうあせ
たけしうのこゝろにうあせ
とけしうのこゝろにうあせ
勝願わ美あやかゝくやけしう

百九十九番

116 た

時鐘

かたけしうのこゝろにうあせ
右 成前室祢

ふれ家の膳女がまじりそ娘もち六百番奇合女
後如口判りまじりよあ五百番奇合定家口判り
りしけ事しをこ先中さきに侍れいむ
為挿南考元托ほよをいん病とつふに二此美
侍家也喜撰或女いん病と中侍り一首其女
曰家此侍りせつり假令らんとつふ此二あり
とつふ家此二あふ類をつしきまは後頼朝臣此
判り女いん病と中侍り女定と雲井とつふ此
一首此中女侍り状やまいとせり歌詠の番と
白とをいん病と中侍り建保此此の奇女
二百定家卿も年と代とをいん病と中さき記
さき記つ此病の奇合よ法とて一語を中さ
侍れいん病と中さき記難女あつ此何は此

二百 愚問賢答女を兼いいん病つりをいさるし申
侍り喜撰式乃同いん病の事記つあやあ女
いぬま女つ侍れと事此次女と侍りな
あつ侍りつこの中侍りさき記つひあつ
らん侍りし恐惟う

二百二番

た

素美巻

きぬくれわきつるあつ此の娘侍りつあやあ

右

中納言

左明乃月とつれつこのあつ侍りつあやあ
きぬくのあつつきあり侍り月わつれの奇女
めつ侍りつあやあ侍りつあやあ侍りつあやあ
又奇此道侍りつあやあ侍りつあやあ侍り

しらわんよし〜は傳ふま〜記也やげうら信
路人なり此中よみい〜んい〜と〜の傳へ
みちをけたる右に方〜する傳難と傳ふぬと
又ま〜色〜る〜る〜傳ふ〜傳ふぬと仍曰
條乃科〜傳ふ〜

二百三番

左

大僧部

一〜〜れをま〜れわ〜し〜し〜わ〜系傳此神の〜

右

茂成朝臣

朽〜〜をあれ野此ま〜人の名傳ふ〜る〜る〜傳ふ〜れ
左に傳わき〜あ〜れ神右志野此ま〜人此傳
乃わ〜り〜色〜ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜傳ふ〜
又持也や

二百四番

左

経清

神志傳ふ〜れ〜み〜あ〜れ〜し〜な〜し〜志〜れ〜と〜乃〜左〜此〜ま〜ぬ〜

右

權打僧部家我

引〜あ〜〜志〜〜い〜月〜志〜〜う〜如〜那〜抄〜記〜わ〜る〜色〜ぬ〜の〜傳〜ふ〜と〜
右〜身〜傳〜ふ〜れ〜ま〜を〜そ〜な〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
い〜り〜は〜〜〜〜と〜是〜傳〜色〜と〜左〜此〜身〜わ〜る〜色〜此〜
海〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
後〜傳〜〜わ〜る〜れ〜と〜い〜あ〜る〜と〜か〜よ〜り〜〜〜〜〜
や〜〜〜〜人〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
是〜傳〜〜〜傳〜〜ぬ〜い〜ま〜り〜野〜此〜し〜〜〜〜〜
な〜あ〜ぬ〜よ〜り〜左〜此〜か〜ら〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

二百五番

二五九 九

權大納言

仰あめなみしきあるは 婦をる心よりさぬくの神れしき
衣 持和親臣

ふぬくは神ゆゑは澤邊とやうきえち芝の鴨と鳴く
九 奇とよははぬあてしきいさるし衣奇と

二六〇番
踏撞うしてさきしう過るふは杉木及うふ
やうしといふ所をくは格言と傳は申道紙

めて持とさうしきう定傳りき

二六〇番

九

入道二位

あふ事とみえしきしき落れ志とわうあ申とそいれ
衣 從三位仲方卿

たの志と落げらざ紀よりより七衣乃婦をさあ
むとといはしきしきらさるあや

二六七番
さうてしきう紀のあやむむきぬ志神れがみさる婦をさあ
衣 持房

あやとあをみしき月をかこし神免は井よりさるん神れわ
九 此奇とよははぬあてしきいさるし衣奇と

れいさうしきうぬらちしきう傳り右は神乃
わうしきとありしきと野れらあうしき傳りあ
やいさるあははしき持とさうしき

二六八番
九 常秀

あふ事とみえしきしき落れ志とわうあ申とそいれ
衣 從三位仲方卿

あつた神のわらひとくろきく振りしをばし 婦を此

118 右

小宰相

ふくは庭のあきらめをくも病や神よりあまふなりをふりし
たの神のわらひをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
みよめあきらめ乃病別報れんをてあおひく
晴願れ因又とくろきく振りし

119 妻

た

正徹

かりをぬきまのこをわらひしをばしとくろきく振りし

右

法下亮孝

ま明はあきらめをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
た弁と保氏急命乃まはしとくろきく振りしをばし
しとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし

いふあきらめをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
くろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
1110 つたはあきらめをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
んくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
りゆりつたはあきらめをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
らんくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
物をとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
をばしとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
りせぬくもや志はしとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
のそみく人くれ中さくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
し出くろきく振りしをばしとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
考はかくくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此
詩は序めかたはくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばしとくろきく振りしをばし 婦を此

あはれみやふかえとて浪のしるしを申しついでに

右

盛長御后

こゝわいのなみは神もそお慈野乃うらふりも若乃志がを
た奇もあはれうみあふふんきつとて死又うらふ
し中とそをさうりやとあふあふう海よこあえ
ゆり右壽と浪の神は出慈野乃浦より若れ
なと能信あふあやとあふえゆれと初め文字す
まゝわいのめとつひてむらひのあふ若乃志はを
とついとあふゆらうあふあふあやうあゆれと
能多れよとてせくやうまうらうと勝と
ゆき

二百十三番

右

持和御后

今やうに驚くちさうのあふ川とあふれあふあふあふあふ

右

左傳御后

あふうのゆうと驚くもあふ果ぬとてまふまふまふまふ
た朝川百葉よりとてうらうとあふうらうとあふ
まゝとぬや右のあふうのゆさうとえれ
うらうちあふうとさうとあふとあふとあふとあふと

二百十四番

右

女三房

あふちさうひらあふうらうなをさうれうらうなふとあふうを

右

定衛

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
た奇浦なるうらうらうとあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

万一人唐長子
船並良且川渡

ちれあまのりとかたのゆれいあふふとんはくひのた
 とかな系難いゆり〜とつたゆりあふふとんはくひのた
 衣れくまをかつ〜下白なく使れあまのりゆり色い
 ちひつへあまのり〜ヤゆり

二百十五番

丸

常秀

うらむいあ〜かひあふふとんはくひのた
 右 入道二位

むきい〜を指あがりぬぢなせせく袖乃ちあがりぬぢあふふとんは
 丸れ〜あふふとんはくひのた
 ゆりいあふふとんはくひのた
 入道二位

二百十六番

丸

氏教

うらむいあ〜かひあふふとんはくひのた
 右 権少将部 宗我

うらむいあ〜かひあふふとんはくひのた
 丸 権少将部 宗我
 うらむいあ〜かひあふふとんはくひのた
 やい〜

二百十七番

丸

権大納言

うらむいあ〜かひあふふとんはくひのた
 右 権大納言

うらむいあ〜かひあふふとんはくひのた

百人
やい
おつ
おつ

たすけに今世志をたすけりいれり侍るに頼れりさ
海にたすけ侍り侍るに頼れりさ
たすけに今世志をたすけりいれり侍るに頼れりさ
海にたすけ侍り侍るに頼れりさ
たすけに今世志をたすけりいれり侍るに頼れりさ
海にたすけ侍り侍るに頼れりさ

二百十八番
た

従三位仲方卿

思ひよき昔の如しをきくおとこまきぬうゝ兄の志を記し給ふ
二百十八番
た

後成朝臣

いふせんをたすけ侍るに頼れりさ
たすけに今世志をたすけりいれり侍るに頼れりさ
海にたすけ侍り侍るに頼れりさ

二百十九番
た

持純

いふせんをたすけ侍るに頼れりさ
たすけに今世志をたすけりいれり侍るに頼れりさ
海にたすけ侍り侍るに頼れりさ

時勢

いふせんをたすけ侍るに頼れりさ
たすけに今世志をたすけりいれり侍るに頼れりさ
海にたすけ侍り侍るに頼れりさ

二百廿番

た

法平亮孝

若れやうきちゆくまふとがめくくかきぬうくんせいのこゑん

115B 右

中納言

多指しうらふびのよも葛れ葉れ風しとく人れあふりなりきれ
両中れ真葛或結遠恨於霜下或寄好便於風
前欲等二首得失不及一字褒貶者れ

二百廿一番

左

泰勲任

何より野村まふとらね多もやかりけくす急のうくみしれ

右

大僧都

うらみわいおとらねれ海あふなり福をらねをかつくさうたり
まふとあふれうらみまふとあふれせり晴風倒
ししてあふり

二百廿二番

左

経清

若んぬまふとらねれせれをらねをらねぬ袖乃ゆあふれ

右

檢校権左衛門尉

あふれこのねいれをらねれをらねれとちとをらねたり

左 右 左 右

二百廿三番

左

小宰相

うらむ或たれをらねと霜かきくさみさうりそ神をさゆぬ

右

成前亮

うらむわいあかりさうふれ(れきあおのい活るまふとらねをらねを
あふれうらみさうふれうらみさうふれうらみさうふれうらみさうふれ
うらむ先づうらむうらむうらむうらむうらむうらむうらむうらむ
うらむむらむうらむうらむうらむうらむうらむうらむうらむうらむ

二百廿四番

丸

四徽

なみ... (faint text)

入宣

い... (faint text)

右... (faint text)

餘... (faint text)

為... (faint text)

い... (faint text)

み... (faint text)

い... (faint text)

く... (faint text)

あ... (faint text)

中... (faint text)

達... (faint text)

ゆ... (faint text)

不... (faint text)

そ... (faint text)

中... (faint text)

り... (faint text)

此... (faint text)

丸... (faint text)

つ... (faint text)

二百廿五番

春述懐

丸

小宰相

かきうしてあうしはきしんしとさあやーやなめはまのり
右 時盤

あうはしあ我我其まそあしがる花をあうてもなうあせりめ
た弄一さ百番弄合李強々弄はぬよりことこ
しは妹のくねしとりあやー起まてめ折しま
あうり那ーと折しめあ似るあや右弄男
とつふ文書の紙かきしり目をもあうあれりち
五折し折しぬ尾しを心さめ持

二百廿七番

左

持房

いそまて花うりきうれ送をさうあ山とてあ世くああめれを
右 権古納言

はうさういん其其喜瓜かきし折しあ義のほくう折しあめ
右弄幸君し弄弄趨く勞む心可有抽賞持

はう其弄是あはれ喜折してあゆさうりなう花
れけありゆる弄しあうれとやああと折る
あうの紙類かきし出し折あうし中か人持
あて志ししうたは勝あなうれ折をいうあう一
あまきりあう

二百廿七番

左

持和朝臣

はう其神せうくともわう君れひろあうりあの子の喜ああ
右 定衛

うれあああてくう紙はくうはのああ志れ思をああ
我君の仁恵は紙津流れはうあてくもなうれ
はくくうあはあ字よりくも志きくあ人折あ紙

いふあれはなりはせむ紀あるはみはみかひのゆくと
とくかめりくくもあはゆり右奇花をくく
らと事とのみ老れ思出みせむとあそしを
りよりゆれは勝負をささめはやゆくと
二百廿八番

左

右迎書中ね

さうさあよう地れ山乃たぐもそそめこのう紀世然とふい
右 迎書

いしし我母世あ家花乃きはうは家月日れたおまき
左 奇花れうさ世はといひのいあふた
くゆりとうめは五名家本の下風さむうそ
と二は奇のうらひううまふあやと中か
人ゆりしみ右奇し又勝一美なりは事

ゆりぬあや持くささめれゆり
二百廿九番

左

法平亮孝

九重うとくふとせは花乃かけはう一は道は去たれたあ
右 入道二位

老う身はさ紙かきめ家年まみの長けり中あふいりゆ
左 奇うとくふとせは花れけとゆり作者のさう
あうさゆゆり柝對九重く花道六年く春
き家人け作者れ申うそ誰人あふいりゆ
ゆりゆゆゆりゆりや志りもてぬかれ和方
ゆりあして勅撰とゆりゆゆゆりゆりゆりゆり
それあひひと六と勢うりあやまうりありゆり
らんゆゆゆゆゆりゆりゆりゆりゆりゆり

うきまゝに在れうきまゝ是れ母とまゝに猶れまゝ
元中一よき中うきまゝ

二百廿五

九

如房

うきまゝと早年其はまゝに母まゝに在れしは花よあましきまゝ

右

從三位仲芳

あまの母まゝとまゝに山はくうきまゝは花はまゝとまゝに

あまの母まゝとまゝに愚老々速懐れ其まゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに人れはまゝに在れしは花よあましきまゝ

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

二百廿一

九

右房

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

右

権少将都宗我

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

二百廿二

九

右房

あまの母まゝとまゝに花よあましきまゝに在れしは

右

氏教

よそおたもまきばう記身はあひもやそれいふゆゑもあつてはる世う
た奇ながみれ志んは古今れたももな家うへみはうん
とに抱ゆく少けるもつゆありうへいさあゆり
右奇しとたとるゆ難いゆし神ももな心たれ
多みれ志んはうまうまや勝とせり

二百廿三番

た

常秀

うはりゆくそおおそあ月も日とおひのおめまはあゆのま

右

権左侍都実政

たうふまきしそぬ世中をこりてうまやゆあ記乃それ
た奇光京れうはり屋をこりてまき一ま
あまうへうおしうさるあはれ右奇
世中とといはゆやそれまなうていお

そらあやゆしなれといてうまやゆあ記れ
それといはるもいうさるそてまきゆりハ
まきうて持ゆはさるまきゆり

二百廿四番

た

盛長物臣

たとい紫のなごぬもなゆあはれまわぬまはひうり
右

成前宿禰

はさるまきう記世中れ花もまき記てあ家をもいそらうん乙
た奇屋うもわうぬはあ家乃今道う録
凡と思つゆあや世信う行れおひも家あ記屋
あしうあうりゆ家まはさるてつゆとい思
よまゆあやあふよそま書うゆ大澤と教
と中ゆあはあゆいゆゆああさゆ家

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ
みちを指しゆさめしゆり

二百廿五番

丸

中細

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

右

持純

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

二百廿六番

丸

大傳都

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

右

入室

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

あや衣れかして又勝つまをて此事いゆぬ

志つゝく在れ勝りたれなるれ侍り

二百廿七番

た

義成朝臣

今あらむわしあゝかゝる世中乃其成りともやうくはまはれ

右

奉命使

ん家うちりうの海をたけたりせしむりうの世やわき物とほ

あめや

二百廿八番

た

為季朝臣

くらまふお弁けうくそのまふくはくはくをてんくうのれ

右

経清

物さうあはれそたぬ世中うらまそていけなむ志くさく

たふらうまきて名保うしうれといひたをちをて

花はあめ志くさらんといふまきさうのうあはれあを

くさくさく竹水又勝原と弁をけや侍り

二百廿九番 長懐舊

た

た迎清中納

あさこはあつとさほくは福しんむく乃古清と志家かや

右

時繁

い海をちを袖ま志くさくさくを志むしわきぬぬぬい

た右の舞おあゝくむくさくはあまの

さくく梅れさくさくぬあやひよさくさくあはれ

うけの勢方を志家人みせあさくさくあ侍りあ勝

二百四十番

深難分祖夜々 艶勝劣易迷 仍持とせり

二百四十二番

左

成前宿禰

いみじくも神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

右

大傳部

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

左 右 仍持とせり

二百四十二番

左

權が傳部宗我

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

右

常秀

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

左 仍持とせり

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

右 仍持とせり

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

二百四十二番

左

為季朝臣

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

右

氏教

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

左 仍持とせり

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

右 仍持とせり

かきみうらぬ神の書といふ川せりかきみうらぬ新乃ちる

仍持とせり

二百四十一番

た

迎講

新ちまをいれらるるふいば初れともたけあむしういふはあけりけし

右

経法

そらもろく新ちまもきるあや草むしう志のふれ福をやそら

たおれあちをれおれく新ちまむしう城志の倉り

ちまもろく又持とせり

二百四十七番

た

如房

まねあまをいれらるるふいば初れともたけあむしういふはあけりけし

右

入室

中ちまをいれらるるふいば初れともたけあむしういふはあけりけし

たおやれい法をいれらるるふいば初れともたけあむしういふはあけりけし

新ちまをいれらるるふいば初れともたけあむしういふはあけりけし

ちまもろく又持とせり

たおれあちをれおれく新ちまむしう城志の倉り

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

ちまもろく又持とせり

二百四十八番

た

持房

まねあまをいれらるるふいば初れともたけあむしういふはあけりけし

右 従三位仲房卿

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ
た右口等しつらあしと持しせり

二百四九番

右 持純

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

右 入道二位

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

又カ持

二百五十五番

右 権左衛門尉實政

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

右 正徹

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

右 初め文字あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

二百五十一番

右 権左衛門尉實政

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

右 定漸

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

あまのつひもあまのつひのつひよりいほひなるに新乃まらぬ

御とせり

二百廿二番

左

權大納言

志きふとも道とこのせむし松を庭にたつこのあやと乃ま

右

盛長納言

葉は風はふ系屋を成むうもまはるあや朝のまは

左は庭列めまま成さく右を家風より色板

をよせころりもさく大畧おめし志れなまや

二百廿三番 秋神祇

左

中納言

おとふこひ月のおまきさく神をむしやたふ心ん

右

右衛門督

庭うふ系ひりをまふおまきさく月な成をみるの婦乃神わ

たおとふれむしを思ふゆし右今れ席は

おとふ成れもいゆ系おやいとたうゆり

右をみさくの婦乃神わく又甘く神能を成る

持

二百廿四番

左

持和朝臣

婦乃乃めえぬ神もみちものちりりまはるあや向うは

右

法平亮春

かまぬみ海をさうさけえさふ思をふ神代おさく月を

右奇國水元年光明寺持政奇合は家長

物長おいはくもありさけさやえさふ山を海

あかきさく山を月けくゆ系おれし

よしやか人ゆきさく思まふ乃月おあり

さげをふくといふと安儀仲久の御方をも
いふに似たりともうさうさう後さういふ一首
此作意よりたゞそよめをたゞしはゆいゆれを忘る
くたゞめめをいひてたの御方の定約り

二言五十一番

た

従三位仲芳

婦は水鏡中其とらふ月紙をくく其の神代乃ひらきき

右

小宰相

吹かあふれそ若あむまきみよこの松のい婦れきとそあ
たのしむ結中何れお持

二言五十六番

た

大傍部

あなやあふ神やそめさんるむゆあよそよりそあ婦れおみえ

右

成家宿禰

いさあといふ世れ婦のまゆつらうぬいゆのつあれはあ
た奇んむゆれ山のもみちらあらんうあよそ
よりそやうゆあそいさういさういさ
うもゆきうゆういさういさういさ
れもみちらあ側れあ月とあういさういさ
くあ深織とあういさういさういさ
うもゆきうゆういさういさういさ
ゆきうゆういさういさういさ
かりぬいさういさういさういさ
あさういさういさういさういさ

二言五十七番

た

権左納言

いさあといふ世れ婦のまゆつらうぬいゆのつあれはあ

衣

權左傳教家改

比ふうらな月まつふか見ちひまゝにほもあやかきそあまぬさ
た奇才三勺出そあまうりあつ先うしくとあ
ゆれと袖乃月うをれと宗治のいあし思出さ
ゆり右奇強白かけそあまぬさハ神ちひの
きんいつゆやいほのおほほうなまやうあゆ
社も志うしく男のれ月うけをみまうりうや
ゆり

二百五十二

衣

氏教

かきうらや神をまらきんを志あてふ月あみれ輝乃まひを
右 為孝朝臣

春日山より月月花右の間うけさまゝに輝うせうあ

た右奇おのりやうりゆあよつうてまのひま
くつふりあさしハ脚あしとゆりあはは
奇合れあうり神威成養乃幸と自水の
度乃奇合あかしくいま先おほせまうあや
けまひハ神祇の歌くあうまうあまうあ
へ

二百五十一

衣

正徹

層々ありてはるのたきいあうみもあま輝れ
右 入道二位

いふい葉をまうかうてかきうらそむ家のみちや輝れまう
たハ情あやうりてはるのたきいあうみもあま輝れ
あまもゆれはまうあひてやさうりゆりま

と教を念ふこそも延久よりけまより准せし書く
の序なるは信より信れはたとひりいぬま
ししく信ありや前妻ありとこれ高社信あり
信くまはしからぬあり信れはとのみなり
へたはしきしきしきしきしきしきしきしき
く勝とこころめられ信り

二百六十二番

丸

信信

めんやあつ神は代はりくよりあつし海をえまの山乃んは月

右

丸進清中納

ふまうのつとけははやなふ月を神はりくはあつ

丸たのりり喜日之是山は月之勝方あつ

二百六十三番

丸

入堂

おまは世乃教なりえまの神はいね系松乃婦り功

右

持房

あはひも神代はしりはりてまやえまの家乃あつ

丸は海世の勢を松は婦りうう右は神代はひ

りをを系松乃あつ日ぬううの信神よしうれ

あしとまかこや信り

二百六十四番

丸

持純

かまの山乃のあはひを神代はりてまやえまの家乃あつ

右

常秀

を海の神代は婦りあつしあつし月を松は婦りあつ

丸右あつあつしあつしあつしあつしあつしあつし

二百六十七番

丸

時勢

ひりきや神とていふもさるる見ぬさらのろふ妹は春の月
女房

久がはれさうひりいおびてつ勢ももくぬ月よみれもを

118/右舟の月よみのあさねの母は秋は沙汰乃始りし

120/屋し又はてそりていつふ初衣もよよみ始りし

子細りてさるは始りしことこれらわつて

母あつてさるしやうふかしくも始りてはれ

122/後舟はしき始りぬ

二百六十八番

丸

迎駕

妹をせはれとていふもさるる見ぬさらのろふ妹は春の月
乃松をさるせれさるもいふもさるる

右

奉急仕

急用にお業れむげけり城をく神代は妹をさるる見ぬさるる

丸はさるしは松をせれいふとあつて右はあ

つこれお業神代乃始りおつてさるる見ぬさるる

124/右はあ

二百六十九番 冬杖

丸

大信部

冬杖の家は道の通ぬ海よりしれあつてはらぬ家はこれやま

右

西織

春日やお業神代はつてはらぬ家はこれやま

丸はあつてのまゝさるる見ぬさるる見ぬさるる見ぬさるる

の維摩會者問三國といふ事とてさるる見ぬさるる見ぬさるる

126/りあつてはらぬ家はこれやま

二傳此と弄く先師くく傳りなをらつて
傳也やある(妻)と此くくもらあ何い傳家
丸乃傳者若此切みむくひて勝字つけらる
へ妻あやとやうけらまうくういさ(中)り
たりりしやん(妻)あやうをて傳とせし傳り
中く(無)ああ(妻)あう(傳)文(水)二年(御)身
合(善)光園(大)園(年)より(何)代(女)は(て)そ
らん(月)を(た)氏(彩)紙(を)む(家)園(此)為(河)と(ま)
を(屋)り(大)園(や)う(神)く(丸)奇(忠)臣(此)あ(海)さ
し(を)あ(い)せ(り)勝(の)字(氏)中(活)妻(う)り(さ)
此(を)屋(て)け(奇)此(善)は(後)一(案)開(白)奇(た)り
く(園)白(や)り(く)と(於)奇(く)傳(者)と(留)馬(傳)
く(仕)者(く)勅(節)紙(此)申(子)細(早)以(丸)三(為)

勝(中)く(う)れ(い)ま(う)く(も)か(ら)あ(ま)り(此)傳(り)ま(家)
契(と)あ(り)と(も)中(ま)あ(や)

二百六十八番

丸

茂成抄臣

右

小宰相

袖(を)む(け)る

丸(は)は(い)ま(の)氏(の)宗(我)と(も)あ(れ)る(ま)を(此)丸(乃)月
丸(右)奇(緒)劣(わ)ら(か)う(記)り(よ)り(持)く(せ)る(家)
き(く)右(奇)の(名)氏(の)宗(と)佛(名)と(れ)
月(く)傳(あ)り(あ)く(あ)く(く)く(傳)家(此)傳(乃)
傳(念)あ(り)わ(ら)う(傳)家(妻)あ(り)く(い)
中(人)を(傳)り(く)く(ま)あ(り)く(い)三(世)十(方)
此(佛)氏(念)く(く)く(ま)あ(り)く(い)西(方)氏(念)

雨朝う〜竹のいふまじし〜
〜竹のいふ

二百六十九番

丸

源信

竹のいふまじし〜竹のいふまじし〜
右 盛長抄

業抄の書は〜竹のいふまじし〜

たすおのいふまじし〜

このおのいふまじし〜

書は及いふまじし〜

〜竹のいふまじし〜

磨室〜竹のいふまじし〜

の竹のいふまじし〜

二百七十番

丸

定衡

満ちたいふまじし〜

右

持和親長

六とせ〜竹のいふまじし〜

たあたる〜竹のいふまじし〜

をよめいふまじし〜

ま〜竹のいふまじし〜

衣〜竹のいふまじし〜

いせふん〜竹のいふまじし〜

物〜竹のいふまじし〜

二百七十一番

丸

持房

乃波をうぶし其あつひの雪かゝるまよしやせましのりた道き

1165 右

從三位仲方

雪の中より心あつてまみ深れ袖ありとて志きみつむらん

たれきよの庭にえりてこころいまは老つて

かゝりや右きせむらうらうら神ありとてま

いわけれとよきあうや中ゆりま志きみつむ

んれ神ありとてれとこころとまきつり

1167 右

入道二位

をこまうはれをのきまみ深れ袖ありとて志きみつむらん

右 入室

えれつえのこぬきまのこころまみ深れ袖ありとて志きみつむらん

1168 右 新法のものやこれゆりしを鶴林に枯樹を

たれきよの庭にえりてこころいまは老つて

かゝりや右きせむらうらうら神ありとてま

いわけれとよきあうや中ゆりま志きみつむ

1169 右

權大納言

まよひぬきまのこぬきまのこころまみ深れ袖ありとて志きみつむらん

右 権少傅部定我

まよひぬきまのこぬきまのこころまみ深れ袖ありとて志きみつむらん

右 権左衛門尉

まよひぬきまのこぬきまのこころまみ深れ袖ありとて志きみつむらん

右 権右衛門尉

1170 右

權大傅部實政

た

胡定此表成の...之ぬねね...

右

持純

いづれいづれいづれ...とねね...
たふの毎同相常...
くくさぬ...
は神...
は...
の...
は...
の...

二〇七

た

氏教

...

右

為重

...

たふの...
の...
の...
の...

二〇七

た

時教

...

右

常秀

...

ぢる難むい傳ふきし 妻もや右舟に衣笠内
府寄めあも祀家ん此らのいけよりいまぬ
このりのむとといとめきんと伝ふおりのけ思ひ
出傳れとんれあのおこいふ事しといふい
よりといとめきしよりみ傳ふこいふはこれ
番と持こいしめらまきふ

二百七十七書

丸

成前宿係

かもくのほみこくしと書ぬし二世れ此のいあはまこく

右

左近衛中納

かえれ月あめねあるし乃あり寺あめねれとまは乃あはれ
丸寄し乃書二白くくも傳ふと右れ舟と文
屋ありすえり舟神正月時あなりと書はる

の紫れあめねえや乃あふととあまてと傳ふ
ころて維摩舎の事あふえん傳ふいとた
くも傳ふかれあれい右れ舟かち傳ふい
二百七十八書

丸

如彦

い海さかひ草れむ海や志記あまこい月の日あまあめ
右 壬寅

春よりあれむこまのあはれい草れあまあはれ
丸寄の草乃む海ああ事とかなく
うくしこれいけりあやあまに十月廿五日
天台智者大神れ忘日そくそれ日あたり
て大傳心慈惠れよみ強し舟寄それかみれ
井乃乃存りあまのしりしそれむ海もあ

やまぐらんと持家ハ後撰ノ一ニ及持家ノ
よしやと仰し侍りしハ少御事一あまをく勝
北家成ゆるとれ侍りし

二百七十九番

左

中納言

おぢはれ御事の四名ハ少御事トノリ此道ハ少御事トナリ

右

宗義伝

法内ノ我れをなましく家持書ハ少御事トナリ少御事トナリ

左 左内侍ノ侍りし御事トナリ少御事トナリ

二百八十番

左

法内亮 宗

おぢはれ御事の四名ハ少御事トノリ此道ハ少御事トナリ

右

宗義傳

この御事の御事ハ少御事トナリ此道ハ少御事トナリ

左 左内侍ノ侍りし御事トナリ少御事トナリ

幼華雖滅空經不壞といふ侍りし御事トナリ

此の御事ハ少御事トナリ此道ハ少御事トナリ

おぢはれ御事の四名ハ少御事トノリ此道ハ少御事トナリ

中納言

寛政二庚戌冬霜月十九日位室爰新字
二百七十五番
九

寛政二庚戌冬霜月十九日位室爰新字

同此二日於十師院校合早以未 女是卷
此書の儀中書の儀係り
寛政二庚戌冬霜月十九日位室爰新字

Xtho
110X
647
17
14

口
大
母

